Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-06

『峯相記』の研究ー十四世紀播磨における歴史叙述の諸相についてー

井上，舞

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2011-09-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲5513
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005513

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

『峯相記』の研究―十四世紀播磨における歴史叙述の諸相について―

氏　　名　：　井上　舞

神戸大学大学院文化学研究科文化構造専攻（博士課程）

指導教員氏名　（主）　樋口大祐　准教授
（副）　福長　進　教授
（副）　市澤　哲　教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

【論文内容の要旨】

『峯相記』は南北朝期の播磨で成立したテキストである。貞和四年十月十八日という時間軸で、峯相山鶏足寺を訪れた旅僧と、当寺に住む老僧という二人の人物を登場させ、両者の対話によって、全体が構成されている。また、その内容はかなり多彩で、話題の中心は播磨の寺社縁起・故事伝承・事件などであるが、その他にも国内仏教宗派の要綱や、武家政権に対する言質などが残されている。なかでも有名なのが、鎌倉末期に登場した悪党にかんする叙述で、当初みすぼらしい有様で小集団を組んでいた悪党が、徐々に勢力を増し、やがてきらびやかな服装をまとった大集団となり、倒幕の一大勢力へと成長していく様が、精緻な筆遣いで記されている。この叙述は中世悪党研究の一級史料として数多の論文に引用され、また、その他の記事についても中世播磨の様相・事件を記した「史料」としてたびたび用いられてきた。

こうした研究を通して「史料」としての『峯相記』の評価は確実なものとなっていったが、それは作中の史実的色合いが濃い記事を断片的に引用した上での評価であって、伝承的側面が強い記事や、仮構された登場人物については、従来あまり注意を払われてこなかった。また、文学研究においても、作中の記事について説話の地方的変容という観点から取り上げた研究はいくつか存在するが、こちらも歴史学研究と同様に断片的な引用にとどまるものであった。つまるところ『峯相記』は、歴史学・文学をはじめとして多方面の研究分野から注目される書物であるにもかかわらず、その全編を通した考察によって、作品の内実に深く迫ろうとした研究は、従来ほとんど行われてこなかったのである。

『峯相記』は先述のように、仮構された〈場〉を設定し仮構された登場人物の対話によって全編が構成されるという、創作的側面を持っている。さらに、作中の記事は史実的性格が強い話にせよ荒唐無稽な話にせよ、物事の起源や栄枯盛衰を説明する話が多い。それはつまり、過去から現在に至るまでの歴史の流れを確認し、その必然性を明らかにしようとする意思があったことをうかがわせる。こうした点に加えて、本書の成立が南北朝動乱期という時代の変革期に重なることも考慮すれば、『峯相記』は歴史叙述的性格を持った作品であるということができよう。本書を「歴史叙述」と評価した研究は、すでに歴史学研究の側から提示されているが、その評価は本書の史実的側面に主眼が置かれたものであった。しかし先に挙げたような『峯相記』の特徴からすれば、史実的な部分に拘泥するのではなく、創作的な部分や虚構とみなされる部分をも視野に入れた、全体的な考察を行うことが肝要ではないだろうか。以上の点をふまえて『峯相記』の研究を行うことによって、「史料」という以外の評価を本書に与えることが可能であると考える。

本論文は如上の問題を念頭におきつつ、文学研究的観点から『峯相記』についての考察を行うものである。とはいえ、先述のように『峯相記』についての研究、特に文学研究的側面からその全体像に迫ろうとした研究はほぼ皆無である。そこで本論文では『峯相記』を読み解くための手がかりとして、本書の歴史叙述的側面に着目し、これを基点として複数の視角からの考察を試みた。

以下、本論文の構成と概要について記す。

第一章「『峯相記』の基礎的研究」は、本書を研究するにあたって、必要な情報を整理しつつ、以後の研究への問題提起を試みたものである。本論文の目論見は、文学研究的側面から本書にアプローチすることであるが、文学研究の中で本書について言及したものはほとんどない。よって、ここでは郷土史研究・中世史研究のなかで扱われてきた『峯相記』の情報も参考にしつつ、諸本・成立年代・作者像・構成等について整理していった。そして、従来の研究では右の基礎的な情報について、本文に

書かれてあることを鵜呑みにして構築された情報が多く、今後の研究を通して根本から見直していく必要があることを指摘した。また、『峯相記』の各章段について概説する中で、それぞれの章段についての問題についても言及している。

次に第二章「『峯相記』顕宗・仁賢即位伝承に関する独自記事について」・第三章「十四世紀播磨の寺社縁起にみる「新羅」」は、作中の個別の記事について考察し、『峯相記』が包括する世界について明らかにしようと試みたものである。まず第二章では、『日本書紀』や『播磨国風土記』に残る伝承が、『峯相記』のなかで別の土地での話として取り上げられていることに着目し、その変容の過程と作中の記事への取り込み手法について考察した。ここから、在地社会における伝承の伝播、再形成において、播磨に点在していた製鉄集団がかかわっていることを指摘した。なおかつ、『峯相記』が他の文献から記事を引用する際には、決して無作為に引用しているのではなく、一定の基準のもとに記事を選択していること、引用する文献についてもその基準に合致しているものを選んでいることを明らかにした。次に第三章では、作中の「新羅」にかかわる言説をもつ記事について取り上げて、それが十四世紀の播磨においてどのような位相を持つかについて考察したものである。具体的には峯相山鶏足寺と広峯社という二つの寺社の縁起を素材として取り上げた。考察の結果、広峯社の縁起の中に込められた「新羅」の位相は、中央で観念される忌避すべき「新羅」としての位相と同一のものであり、峯相山縁起のそれは、中央に存在する観念とは異なる位相を持つことが判明した。なおかつふたつの「新羅」は互いが互いを相剋するような関係で存在しており、そこに播磨の独自性をみることができると指摘した。

以上の考察から、中世の播磨が決して中央と同一の文化や観念を持ち得ておらず、『峯相記』はそうした従来の知見とは異なる次元の言説群を多く取り込んでいることが判明した。しかし、第二章・第三章のように個別の伝承を一つ一つ取り上げていくだけでは、『峯相記』という作品の本質に迫ることは難しい。そこで第四章以降は、『峯相記』の作品世界にせまるための作業として、本書の記事全体に目を配り、かつ成立期である南北朝時代の播磨の様相に留意しながら、以下のような考察を試みた。

まず第四章「播磨の伴善男流罪譚とその周辺―『峯相記』とのかかわりから―」は、作中の峯相山鶏足寺に関わる記事を取り上げ、『峯相記』の語りの舞台となった峯相山鶏足寺が、作中においてどのような性格を付されているかを明らかにしようとしたものである。ここでは、峯相山の縁起全体について、それが開創縁起にあたる部分と、峯相山の周辺地域の言説を取り込んで自らの歴史の中に位置づけようとした部分があることを指摘した。さらに、開創縁起と周辺の言説には、それぞれ異なる境界観念が含まれていることを明らかにし、そうした現象が発生した理由を、縁起成立時期の社会情勢を絡めながら解明していった。

次に第五章「『峯相記』の記事選択意識―“語られないこと”への視線―」では、『峯相記』が多くの雑多な記事を取り込んでいるがゆえに、その全体像が見えにくくなっていることから、逆に『峯相記』が叙述しなかったものに着目して、そこから本書の記事選択意識、言い換えれば歴史叙述の枠組みに迫ろうとしたものである。『峯相記』には、鎌倉中末期に比較的播磨国内で流布していた時宗、また南北朝動乱期に播磨国内で勢力を持っていた赤松氏にかんする記事が非常に少なく、また、赤松氏の名を意図的に明記しなかったともとれる表記がある。さらに『峯相記』が貞和四年を作品の時間軸としているにもかかわらず、元弘元年以降の話題をほとんど作中に取り込んでいないことにも言及し、そこから、『峯相記』作者の動乱期に対する批判と配慮の視線を読み取った。加えて、『峯相記』の包括する世界と、従来の中世播磨史研究を通して構築された播磨世界との距離感についても言及した。

なお、第五章については補足として、補論「『峯相記』と播磨の聖徳太子信仰について」を付している。播磨は比較的聖徳太子にゆかりの深い土地と見なされてきたが、『峯相記』には聖徳太子に関係する話がほとんど載せられていない。第五章でもこの点については触れたが、その具体的な理由は明らかにすることができなかった。よって、これを補うために、古代から中世にかけての播磨にあった聖徳太子伝承について、伝承の管理者と目される寺院の動向や、社会情勢的側面も考慮しながら再吟味し、『峯相記』の中に聖徳太子にかんする話が残らない理由について考察していった。

ここまでの作業を通して、『峯相記』が文永・弘安の役以降の社会変動の影響を多分に受けていること、かつ作者はそうした動乱期の世相に対して、批判的な視線を持ちながらも正面からそれを批判できる立場になく、それが作品に反映されている、つまり作中に批判と配慮という二重性を内包していることを明らかにした。

以上の論考は、『峯相記』とその成立時期である南北朝動乱期に焦点を当てたものである。しかし、『播磨国風土記』が世に流布していなかった近世期においては、作中の言説は多くの地誌類に取り込まれ、播磨の歴史を形作る一要素となった。また、近年でも中世播磨史の解明のために『峯相記』はなくてはならない史料として扱われている。言い換えれば、『峯相記』の中に納められていた言説群が、その後の播磨の歴史の構築に影響を与えたといえるであろう。そこで第六章「斑鳩寺本『峯相記』と十五世紀の播磨」では、成立後の『峯相記』の受容と展開を探るための試みとして、現存最古の写本である斑鳩寺本と、同本が書写された時期に相当する十五世紀から十六世紀の播磨の状況に焦点を据え、同時期に『峯相記』が書写された必然性について考察していった。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	井上　舞
論 文 題 目	『峯相記』の研究－十四世紀播磨における歴史叙述の諸相について－

要　　旨

本論文は、南北朝期の播磨で成立した『峯相記』について、特にその歴史叙述的側面に主眼をおいて考察した論考である。『峯相記』は貞和四年（一三四八）十月十八日という時間設定の下、峯相山鶏足寺を訪れた旅僧と、当寺に住む老僧の二人の人物を登場させ、両者の対話によって全体が構成されている。その対話内容はかなり多彩で、話題の中心は播磨の寺社縁起・故事伝承・事件等であるが、その他にも国内仏教宗派の紹介や、武家政権に対する批評的言及などが記されている。

なかでも有名なのが、鎌倉末期に登場した悪党に関する記述であり、歴史学の立場から、鎌倉末期の騒然たる世相を立証する「史料」的価値の高い記述としてたびたび引用されてきた。しかし、悪党に関する記述は『峯相記』のごく一部であり、『峯相記』の記述全体に強い関心がもたれてきたわけではない。また、文学研究の立場からも、作中の記事の説話的変容について断片的に分析した研究は存在するが、全編を通した包括的考察に基づいて作品の内実に深く迫ろうとした研究は少ない。本論文は同作品が冒頭に架空の「場」を設定し、架空の登場人物に播磨に関する歴史を語らせると言う、かなり人工的・意図的な構成を有していること、また、一見荒唐無稽に見える伝説も含め、作品全体に過去から現在に至るまでの播磨地域の歴史の流れを確認しようとする意思が読み取れること等に注目し、『峯相記』を創作的歴史叙述として検討しようとしたものであるといえる。

本論文は全体で六章から構成されている。第一章「『峯相記』の基礎的研究」では、同書の諸本・成立年代・作者像・構成等について、郷土史研究や歴史学絵の成果をも取り込みつつ、整理を試みている。その過程で、先行研究が必ずしも上述の作品の創作的・構成的性格に充分な注意を払わず、本書の記述を歴史的事実としてそのまま受け取る傾向があることを指摘している。

第二章「『峯相記』顕宗・仁賢即位伝承に関する独自記事について」は、『日本書紀』や『播磨国風土記』に残る当該伝承が、『峯相記』では別の土地の伝承として記述されていることに着目し、その変容の過程と作中への取り込みの手法について考察した。そしてそのことを通して、播磨に点在していた製鉄集団が伝承の変容に関わっている事を明らかにした。さらに、『峯相記』が他の文献を引用する際の姿勢として、自身の伝承へのスタンスに合致・適合するものだけを選択的に再構成していることをも指摘している。第三章「十四世紀播磨の寺社縁起にみる「新羅」」は、作中の「新羅」に関わる複数の説話（峯相山鶏足寺の縁起と播磨広峯社の縁起）を取り上げ、両者における「新羅」の位置づけの共通性と差異について考察した。広峯社縁起における「新羅」の位相は、9世紀後半以降の中央で観念されていった、禍々しく忌避すべき「新羅」像と共通しており、他方峯相山縁起のそれは、より肯定的で文化の先進地としての「新羅」像を含みこむものであった。論者はこの両者が互いを相克あるいは補足しあう形で存在している点に播磨の独自性を見出そうとしている。

第四章「峯相山鶏足寺縁起と伴善男伝承－『峯相記』の語りの場について－」では、峯相山縁起全体を開創伝説と周辺地域に関する言説とに分類し、それぞれが異なる境界観念を有していることを明らかにし、その現象を縁起成立時期の社会情勢との関連性において考察している。第五章「『峯相記』の記事選択意識－“語られないこと”への視線－」では、播磨の歴史において相応の重要性や存在感を指摘されているにも関わらず、『峯相記』に記述されなかった事物に着目して、そこから作品の記事選択意識（歴史叙述の枠組み）に迫ろうとしている。具体的には、鎌倉末期に播磨国内で流布していた時宗に関する記述がほとんど見えないこと、南北朝動乱期に足利幕府方の一大勢力に成長した赤松氏に関する記事が意図的に避けられていること、また語りの時点を貞和四年（一三四八）に設定しているにも関わらず、元弘元年（一三三三）以後の話題が非常に少ないこと、等から、作者の動乱期に対する批判と配慮を読み取ろうとしている（補論「『峯相記』と播磨の聖徳太子信仰」では、同書に聖徳太子に関連する説話が不自然なほど記載されていない事実とその背景について、伝承の管理者と目される寺院の動向や社会情勢も考慮しながら検討している）。

最後に、第六章「斑鳩寺本『峯相記』と十五世紀の播磨」では、成立後の『峯相記』の受容と展開を探るために、現存最古の写本である斑鳩寺本と、同本が書写された十五～十六世紀にかけての播磨の状況を検討し、斑鳩寺本が筆写された環境をめぐるより大きな政治的文脈について探求している。

本論文は『峯相記』の全体像を文学研究者の立場から解明しようとした意欲的な論考であり、数々の新しい着眼点を示しており、今後の『峯相記』研究にとって不可避の論考をなしている。とはいえ、個々の論考については未だ考察が不充分な点も見受けられる。たとえば第二章は『日本書紀』『水鏡』等を駆使して『峯相記』における当該伝承の独自性を抽出した独創性の高い論考だが、同書が何故当該伝承の舞台として従来の「美嚢郡」ではなく「宍粟郡」を設定しているのか、その背景については宍粟郡に位置する一宮伊和大明神との関係を示唆するのみであり、今一歩ふみこんだ検討が可能であると思われる。第三章で正負両様の「新羅」観が存在したことを明らかにしたことは功績といえるが、その両者の関係性を単純に対立的に捉えるのではなく、両者が共存し得た文化的状況の構造をあぶり出す必要があろう。第四章では、複数の異なる境界観念のあり方を見出したことは意義があるが、それらを中世都市史研究の成果と相互照射させた研究が課題になろう。第五章でも、『峯相記』作者の視点の政治的階層性を、もう少し踏み込んで検討することは充分可能であると思われる。

しかしながら、本論文が先行研究にない斬新な視点による問題提起を幾つも行なっている事は明らかであり、今後の『峯相記』研究史、および論文提出者個人の今後の研究展開における豊かな可能性を充分予想させるものである。本審査委員会は以上の理由により、全員一致で、論文提出者井上舞が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

主査記載 氏名・印	福長　進

審査委員

区　分	職　　名	氏　　名
主　査	教授	福長　進
副　査	教授	市澤　哲
副　査	准教授	樋口大祐